続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第２回

○マサルカオマプ

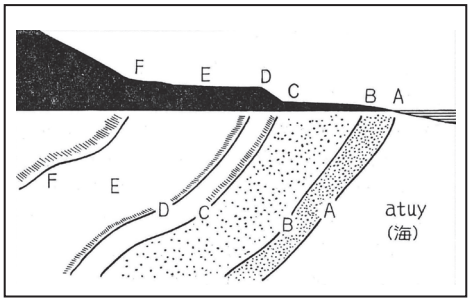
「マサルカオマプ」は、「マサル（草原）・カ（上）・オマ（入る）・プ（ところ）」という意味で、草原への入り口のことを表しています。

「マサル」は、海辺の砂浜より一段高くなっている草原のことで、白糠地名研究会は、マサルカオマプの「マサル」を釧白工業団地北側にある高台「庶路マサルカ（字名）」として、「航空写真で確認すると、砂丘の上にひらけたマクンマサル（奥の草原）の様相をはっきりとみてとることができる」と説明しています。

また、白糠市街地のＪＲ線南側も、かつては「マサルカ」という字名で呼ばれていました。消防署の前の通りから見ると、国道38号が一段高くなっていることで、その由来がわかります。

■アドイからマクンマサルまで

言語学者の知里真志保博士は、「アドイ（海）」から「マクンマサル」までを次の図で説明しています。



『知里真志保著作集３　生活誌・民族学編』「地名アイヌ語小辞典」から

Ａ～Ｂ／ペトタ（濡れた砂原・波打ち際）
Ｂ～Ｃ／サトタ（乾いた砂原）
Ｃ／フンキポク（砂丘の下）
Ｃ～Ｄ／フンキコトル（砂丘の斜面・砂丘の途中）
Ｄ／フンキカ（砂丘の上）
Ｄ～Ｅ／サンケマサル（浜手の草原）
Ｅ～Ｆ／マクンマサル（山寄りの草原・奥の草原）

このことから、庶路の「マクンマサル」に対して、白糠市街地のマサルカは「サンケマサル」ということができます。

○チプタナイ

「チプタナイ」は、かつて白糠最大の炭鉱だった明治鉱業の庶路炭鉱があったところです。

「チプ（舟・丸木舟）・タ（つくる）・ナイ（沢）」という意味から、舟をつくる材料となる木が茂っている沢のことをいい、この沢で舟を作ったことから、その名が付きました。丸木舟は、アイヌの人たちの生活に欠かせないもので、河川や沼で衣食住に必要な原材料をとり、運ぶために使われました。

現在、東側の高台では、平成30年４月の開校を目指して「庶路小学校・中学校」の新しい校舎の建設が進められています。「チプ」はもともと「チ（われら）・オ（乗る）・プ（もの）」という意味ですので、チプタナイでは、今まさに子どもたちの「われら乗るもの」がつくられています。

■一世紀ぶりの進水式

ウレシパチセには、１９８７年（昭和62年）に作られた丸木舟があります。

長さ５・４メートル、最大幅85センチ、重さ１１０キロで、樹齢およそ２００年、直径１メートルのカツラの木から約４カ月かけて作られました。

カツラの木は、アイヌ語で「ランコ」と言い、丸木舟のほかにも、臼や杵、小刀の柄など、さまざまな木製品の材料として使われたほか、皮の煮汁は染料になったということです。

丸木舟を作る作業は、６月に安全を神に祈って始まり、10月、パシクル沼で、白糠では１００年ぶりとなる進水式の儀式「アシリチプ　サンケ（新しい・舟・出す）」が行われました。

丸木舟進水式の様子